



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	昭和30年代コンクリート造教会建築の設計手法 : 建築家元田稔と教会建築
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 35, 29-32
Issue Date	2000-07-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46623
Type	journal article
File Information	35_29-32.pdf



昭和30年代コンクリート造 教会建築の設計手法

——建築家元田稔

と教会建築——

川 島 洋 一

はじめに

本研究は^(註1)大正から昭和62年まで建築活動を展開したキリスト教信者で建築家であった「故元田稔」が関与した50数棟という多くの教会建築の設計動経過に注目し、その設計手法と人物像について考察する事が目的である。

本稿では明治中期から伝道が開始された現日本基督教団（以下教団略）高井戸教会会堂の変遷を明らかにし、元田が昭和30年代に設計した現会堂の形態について考察し、同時に既報「聖公会仙台基督教会^(註2)（以下仙台教会

略）」と比較しその設計手法と特徴について述べる。

1 教団現高井戸教会伝道活動と教会建築^(註3)

1・1 伝道活動

明治中期東京府豊島区角筈でのミス・バラによって開始された伝道は、その後講義所献堂によって定着し、明治30年には日本基督教会（以下日基略）中会に加入し明治32年に認可された。初期講義所は消失したが再建され同37年には「レバノン教会」更に角筈教会と名称を変え（大正7）、また昭和16年の宗教団体法によって教団に所属し戦後を向かえた。その後日基に復帰せず教団に留まり、昭和35年高井戸教会となった。建築家元田稔が関与したのは高井戸教会では4棟目の会堂で、鉄筋コンクリート造を採用しての設計である（昭和36）。

1・2 教会建築の変遷（写真1）

「講義所と初期会堂」初期講義所は木造平家（明治24）であったが同33年に消失、2年後敷地3百坪で木造平家切妻屋根の講義所を復興し、レバノン教会と改名し初期会堂として昭和20年の東京大空襲焼失まで使用した。

〔仮会堂と前会堂〕 戦後牧師館兼用木造平家仮会堂を献

堂し（同21年）、翌年米軍宿舎であつたコンセット型建物が割り当てられ、軽量鉄骨造外壁金属板の半筒状建物前面に木造玄関棟を付設した会堂であつた。内部は半円形断面で礼拝室は単廊式対面形式。同26年には玄関棟改修により木造2階建切妻屋根を増築した。

〔現会堂（図1）〕 会堂の復興は米軍の協力に始まるが区画整理により淀橋浄水場からの移転をきっかけに会堂建築へと進み、土地売却で建設資金を得て移転先を高井戸として現会堂を建設した。設計は元田稔が担当し会堂兼幼稚園の鉄筋コンクリート造2階建が献堂された（昭和36）。

2 昭和30年代コンクリート造教会建築の

設計手法

2・1 高井戸教会現会堂の設計手法（図参照）

初期、前会堂での平面形を意識し敷地形状により細長長方形で中央部より前面は会堂、後部は園舎とし、更に別棟木造2階建の牧師館を置き各機能を分離した設計で

あつた。更に外観は切妻屋根妻側を正面とし、陸屋根独立塔と妻壁上部にバラ窓を置き、桁方向柱は控壁的にデザインされている。又1階には垂直ルーバーが使用され、元田の設計では例のない手法である。この長い側面は塔が煙突やマスト、側面窓配列が船舶の表情に類似し、遠景では軍艦の様な形態である。

2・2 高井戸教会と仙台教会での設計手法（図参照）

〔正面形態〕 既報の仙台教会では切妻反り屋根で寺社仏閣的意匠だったが、実施では直線状の切妻屋根（昭和30年落成）となり、逆に高井戸ではコンクリート造特有の水平陸屋根を提案したが切妻屋根の正面形となった。すわち前者では和風から洋風へ、後者では新構造であつたにも関わらず日本の在来構法での屋型根となった。これらの手法は元田の基本的姿勢がうかがわれ、戦後のキリスト教ブーム中であつたにせよ西欧そのものの教会建築ではなく日本の伝統的意匠を取り入れる方針があつたと推察する。

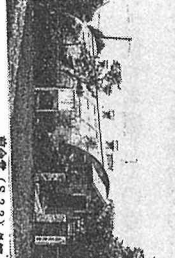
〔塔形態〕 また塔は元田のデザインの基本であり、仙台

【写真1】

高井戸教会 教会建築家 堀江 高井戸教会の教会（旧ルンバウ）



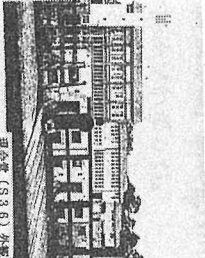
初級教会 (M.37) 外観



初級教会 (S.227) 外観

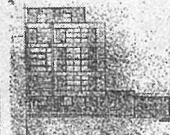


初級教会 (S.26) 外観

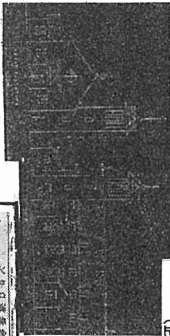


初級教会 (S.36) 外観

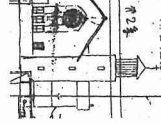
高井戸教会正面図



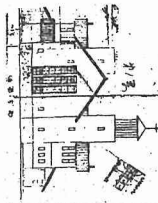
高井戸教会の教会建築家 堀江 高井戸教会の教会（旧ルンバウ）



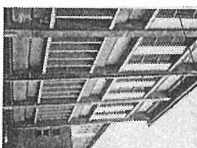
初級教会正面図



初級教会正面図



初級教会正面図

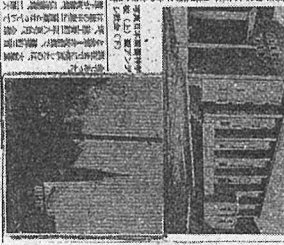
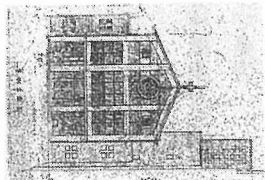


【写真2】 高井戸教会（左高井戸教会）

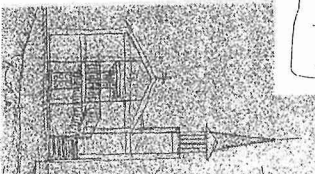
高井戸教会と教会建築家の建築デザイン比較 【図版】

【資料】 元田の教会建築デザインとその基本姿勢

高井戸教会のローマ式正面図（1）（西側）



St. Andrew's Japanese Church
Yokohama



高井戸教会のゴシック式正面図（1）（西側）

教会でも塔上の和風入母屋屋根のデザインから緩勾配の

方形に変え、高井戸では初期から水平陸屋根としている。

すなわち異教社会での正面形を積極的な伝道活動の一つとして考え、日本の伝統と西欧文化のバランスを考えてのデザインであった。

「礼拝室形態」両者共に正面講壇に直面して2階信徒席を配置し、天井は斜梁を露出し小屋組を見せたデザインで、また桁方向合掌尻に設けた間接照明のデザインも同じである。

「部分的意匠」外観では仙台の深い庇のテラスと高井戸での垂直ルーバーが特徴で、両者の意匠導入（写真2）には上からの太陽光線を避ける水平のルーバー、また太陽の方位を考慮しての垂直ルーバー等の手法によって、元田にとっては仙台での日本的縁側空間の演出、丘陵地の高井戸では上昇性を強調しながら間接光を得るための工夫であった。また、仙台での曲線手摺は高井戸にはない。

おわりに

以上だがこれまでと同様、正面の塔設置に執着し、本稿の2棟では鉄筋コンクリート造の大胆な塔を採用する事が出来た。この手法の背景には、日本の近代的な教会建築として高井戸教会設計前後に書かれたスケッチ図（資料参照）と「ロマネスクの近代化、ゴシックの近代化」とのメモによって元田の設計の基本的姿勢がうかがわれ、後者のデザインに固執したと考えられる。更に一九五〇年代の近代的な西欧における教会建築に刺激されながら、光の演出という新しい手法を取り入れての作品となったと言える。

〔註〕

（註1） 93～99年度日本建築学会大会梗概集及北海道基

督教会会基督教（第30～31）で発表

（註2） 「同基督教第33号」参照（98）

（註3） 「目で見る高井戸教会の歴史」同編集委員会

（86）を参考